愛知県下の窯業遺跡出土資料に関する基礎的調査報告Ⅷ
－猿投窯鳴海 52 号窯跡出土資料の調査（1）－

大西　遼
（愛知県陶磁美術館 学芸員）
内記　理
（愛知県立大学日本文化学部 准教授）
数井　奏太朗
（同 3 年生）
杉本　彩夏
（同 3 年生）
竹内　心哉
（同 3 年生）
槌本　彩乃
（同 3 年生）
道家　穂乃華
（同 3 年生）
濱津　怜太
（同 3 年生）
箕浦　壮哉
（同 3 年生）
村田　碧
（同 3 年生）
水谷　有希
（同 2 年生）

はじめに

愛知県は国内屈指の古窯群である猿投山西南麓古窯跡群（以下、猿投窯）が古墳時代中期に開窯して以降、連綿と窯業生産を展開してきた地域である。日本全国を見ても愛知県のように古墳時代から現在に至るまで、連綿と窯業史を追うことのできる地域はない。

県下の窯業遺跡は各時代の生産活動の様相を現代に伝えるものであり、当地の窯業史のみならず日本陶磁史の基礎資料として極めて貴重な情報を内包している。これらの資料の研究・活用を目指し、2018 年以降窯跡出土資料を主な対象として実測図の作成を通した考古学的基礎的調査の報告を行ってきた（註 1)。

本稿では、令和 7（2025）年度に愛知県陶磁美術館と愛知県立大学日本文化学部が共同で実施した猿投窯鳴海 52 号窯跡出土資料の調査報告を行う（図 1)（註 2)。実測図の作成と報

告文の執筆分担は各文末に示した。猿投窯の編年研究には多くの蓄積があるが、本稿では基本的に『愛知県史 別編 窯業 1 古代 猿投系』で提示された編年を用いる（註 3)。ただし、実年代については研究者間で意見の相違があり、本稿では詳細な実年代を示さず窯式の提示に留めることとする。実測図中の各調整等の表現については図 2 に示した。(大西・内記)

１．鳴海 52 号窯跡と出土資料の概要（図 1）

鳴海 52 号窯跡（NN-52 号窯跡）は、愛知県日進市赤池町箕ノ手に所在し、猿投窯の鳴海地区（鳴海支群）の北東部に位置し、鳴海地区の北東に隣接する折戸地区とも近い位置にある。別称に折戸 33 号窯跡（O-33 号窯跡）がある（註 4)。発掘調査は行われていない。本稿で報告する鳴海 52 号窯跡出土資料（個人蔵）は、1960 年代に当地域の開墾の際に採集されたもので、聞き取り調査により現在の遺跡地図における本窯の出土品として特定されたものである。

鳴海 52 号窯跡出土資料は、8 世紀代に比定される須恵器と 9 世紀代に比定される灰釉陶器（黒笹 90 号窯式期を中心とする時期）の大きく二つに分けられる。異なる操業時期の 2 基以上の窯が存在した可能性があるが、本稿では 8 世紀代に比定される資料群を対象とする。(大西)

２．鳴海 52 号窯跡出土の個別資料の報告（図 3～5）

図 3～5 に提示した資料は、全て須恵器である。ただし一部の須恵器には、ハケ塗り等の明確な施釉痕は見いだせないが、肩部外面等の全周に灰釉層を持つ、いわゆる原始灰釉陶器に該当するものがあり、個別資料に（原始灰釉陶器）として示した（註 5)。また、色調の判定と表記には、『新版 標準土色帖（43 版)』(2023、日本色研事業株式会社発行）を用いた。

1～10 は須恵器の杯蓋である。1 の色調はにぶい赤褐（5YR5/3）である。焼成は良好で、胎土は密である。器高 3.2 ㎝、口径 16.9 ㎝である。天井部外面の 2 分の 1 程に回転ヘラ削りが施され、それ以外は回転ナデが施される。内面に「D」のヘラ記号がある。口縁部の残存率は 30％である。(大西)

2 の色調は黄灰（2.5Y5/1）である。焼成は良好、胎土は密で、黒色斑点が見られる。器高が 2.9㎝、口径が 14.7㎝である。天井部外面の 3 分の 2 程に回転ヘラ削りが施される。口縁部の残存率は 70%である。(杉本)

3 の色調は褐灰（10YR5/1）である。焼成は良好で、胎土は密である。器高 2.8 ㎝、口径 16.6 ㎝である。天井部外面の 2 分の 1 程に回転ヘラ削りが施され、他は回転ナデが施される。口縁部の残存率は 40%である。(濱津)

4 の色調はオリーブ黄(5Y6/3)である。焼成は良好で、胎土は密である。器高 3.4 ㎝、口径 16.7 ㎝である。天井部外面の 4 分の 3 程に回転ヘラ削りが施され、その他は回転ナデが施される。口縁部内面に小石とボロが多く付着する。口縁部の残存率は 50％である。(槌本)

5 の色調はにぶい橙（7.5YR7/4）である。焼成は良好で、胎土は密である。器高 4.2 ㎝、

口径 16.2 ㎝、幅 16.6 ㎝である。天井部外面の 2 分の 1 程に回転ヘラ削りが施され、他は回転ナデが施される。口縁部の残存率は 10%である。(大西)

6 の色調は褐灰 (7.5YR4/1) である。焼成は良好で、胎土は密である。器高 4.1 ㎝、口径 15.0 ㎝である。天井部外面の 2 分の 1 程に回転ヘラ削りが施され、他は回転ナデが施される。口縁部の残存率は 40%である。(箕浦)

7 の色調は黄灰 (2.5Y5/1) である。焼成は良好で、胎土は密である。器高 4.2㎝、口径 16.5㎝ である。天井部外面の 2 分の 1 程に回転ヘラ削りが施され、他は回転ナデが施される。天井部内面にヘラ記号がみられる。口縁部の残存率は 55%である。(道家)

8 の色調は灰黄褐(10YR5/2)である。焼成は良好で、胎土はやや粗である。器高 3.6㎝、復元口径 15.9㎝ である。天井部外面の 3 分の 1 程に回転ヘラ削りが施され、それ以外は回転ナデが施される。(水谷)

9 の内面には無台杯の底部が、外面には杯の口縁部が融着して一部が残っている。杯蓋と融着した無台杯の色調は青灰 (5PB5/1) である。焼成は良好で、胎土は密である。器高 3.1 ㎝、口径 13.0 ㎝である。天井部外面の 3 分の 2 程に回転ヘラ削りが施され、他は回転ナデが施される。蓋の内面から口縁部にかけて自然釉が見られる。口縁部の残存率は 90%である。(村田)

10 の色調は灰 (N6/) である。焼成は良好で、胎土は密である。器高 3.8 ㎝、口径は 18.4 ㎝である。天井部外面の 3 分の 1 程に回転ヘラ削りが施され、他は回転ナデが施される。口縁部付近に自然釉が見られる。口縁部の残存率は 20%である。

11～20 は須恵器の有台杯である。11 の色調はにぶい橙 (5YR6/4) である。焼成は良好で、胎土はやや粗い。器高 3.6 ㎝、口径 14.8 ㎝、底径 12.1 ㎝である。底部外面は中央に回転糸切痕があり外周は回転ヘラ削りが施される。他は回転ナデが施される。底部外面に「D」と「×」を重ねたヘラ記号がある。底部の残存率は 30%である。(大西)

12 の色調は暗青灰(10BG4/1)と暗赤褐(2.5YR3/4)である。焼成は良好、胎土は密で、黒色斑点が見られる。器高 3.5㎝、口径 13.2㎝、底径 11.0㎝ である。底部外面に回転ヘラ削りが施され、他は回転ナデが施される。底部外面に自然釉が見られる。口縁部の残存率は 30%、底部の残存率は 50%である。(竹内)

13 の色調は黄灰 (2.5Y5/1) である。焼成は良好で、胎土は密である。器高 3.8 ㎝、口径 14.2 ㎝、底径 11.4 ㎝である。底部外面には回転ヘラ削りが施され、他は回転ナデが施される。口縁部の残存率は 35%、高台の残存率は 50%である。(村田)

14 の色調は灰褐 (7.5YR5/2) である。焼成は良好で、胎土は密である。器高 3.4 ㎝、口径 14.0 ㎝、底径 10.6 ㎝である。底部外面は中央に回転糸切痕があり、外周は回転ヘラ削りが施される。他は回転ナデが施される。底部外面に「―」のヘラ記号がある。底部の残存率は 40%である。(大西)

15 の色調は暗灰黄(2.5Y5/2)である。焼成は良好で、胎土は密である。器高 3.85㎝、復元口径 15.5㎝、復元底径 11.4㎝ である。底部外面は中央に回転糸切痕があり、外周は回転ヘ

ラ削りが施される。他は回転ナデが施される。貼り付け高台である。底部の残存率は 45%、口縁部の残存率は 40%である。(水谷)

16 の色調はにぶい赤褐(5YR4/4)である。焼成は良好で、胎土は密である。器高 3.9 ㎝、口径 15.8 ㎝である。底部外面は回転ヘラ削りが施され、他は回転ナデが施される。口縁部の残存率は 40%である。(槌本)

17 の色調は灰 (5Y5/1) である。焼成は良好で、胎土は密である。器高 3.8㎝、底部 10.5㎝である。底部外面は回転ヘラ削りが施され、他は回転ナデが施される。口縁部の残存率は 25%、底部の残存率は 30%である。(道家)

18 の色調は褐灰 (10YR5/1) である。焼成は良好である。胎土は密である。器高 3.9 ㎝、口径 16.8 ㎝、底径 12 ㎝である。底部外面は回転ヘラ削りが施され、他は回転ナデが施される。口縁部の残存率は 20%で、底部の残存率は 30%である。(濱津)

19 の色調は灰 (N5/0) である。焼成は良好で、胎土は密である。器高 3.7 ㎝、口径 12.9 ㎝、底径 9.9 ㎝である。底部外面は回転ヘラ削りが施され、他は回転ナデが施される。外面全体に自然釉が顕著に認められ、口縁部外面に砂粒を多く含む粘土塊が融着しており、窯材に転用されたものと考えられる。高台は貼り付け高台である。また、口縁部の残存率は 45%である。(箕浦)

20 の色調は明黄 (10YR6/6) である。焼成は良好で、胎土は密である。器高 4.1 ㎝、口径 14.1 ㎝、底径 10.9 ㎝である。底部外面は回転ヘラ削りが施され、他は回転ナデが施される。底部外面中央に「＋」のヘラ記号が見られる。高台は貼り付けである。口縁部の残存率は 20%、底部残存率は 40%である。(数井)

21～26 は無台杯である。21 の色調は暗褐 (10YR3/3) である。焼成は良好で、胎土は密である。器高 4.3 ㎝、口径 11.8 ㎝、底径 7.7 ㎝である。底部外面に回転ヘラケズリ、他は回転ナデが施される。口縁部の残存率は 35%である。口縁から底部外面にかけて自然釉が見られる。(数井)

22 の色調は灰黄(2.5Y6/2)である。焼成は良好で、胎土は密である。器高 4.0㎝、口径 10.8㎝である。底部外面は回転ヘラ削りが施され、他は回転ナデが施される。口縁部の残存率は 50%である。(槌本)

23 の色調は明赤褐(2.5YR5/6)である。焼成は良好で、胎土は密である。器高 3.7㎝、口径 12.2㎝、底径 5.6㎝である。底部外面に回転ヘラ削りが施され、茎痕も認められる。他は回転ナデが施される。口縁部の残存率は 15%、底部の残存率は 100%である。(竹内)

24 の色調は灰褐 (7.5YR6/2) である。焼成は良好で、胎土は密である。器高 2.4 ㎝、口径 12.9 ㎝、底径 7.8 ㎝である。底部外面に回転ヘラおこし痕が認められる。他は回転ナデが施される。底部の残存率は 50%である。(大西)

25 の色調は黄灰(2.5Y4/1)である。焼成は良好で、胎土は極密である。器高 3.8㎝、復元口径 13.0㎝、底部 5.8㎝である。底部外面に回転糸切痕があり、他は回転ナデが施される。口縁部の残存率は 50%、底部の残存率は 100%である。(水谷)

26 の色調は褐灰（10YR5/1）である。焼成は良好で、胎土は密である。器高 3.4 ㎝、口径 12.9 ㎝、底径 6.9 ㎝である。底部外面は回転糸切痕があり、他は回転ナデが施される。口縁部の残存率は 40%、底部の残存率は 100%である。（濱津）

27～30 は無台椀である。27 の色調は灰褐（7.5YR6/2）である。焼成は良好で、胎土は密である。高 4.0 ㎝、口径 13.5 ㎝、底径 7.1 ㎝である。底部外面に回転糸切痕があり、他は回転ナデが施される。底部の残存率は 45％である。（大西）

28 の色調は灰黄（2.5Y6/2）である。焼成は良好で、胎土は密である。器高 3.5 ㎝、口径 12.4 ㎝、底径 5.6 ㎝である。底部外面に回転糸切痕があり、他は回転ナデが施される。口縁部の残存率は 40％、底部の残存率は 100％である。（村田）

29 の色調は褐灰（10YR6/1）である。焼成は良好で、胎土は密である。器高 3.5 ㎝、口径 13.6 ㎝、底径 6.7 ㎝である。底部外面は回転糸切痕があり、他は回転ナデが施される。底部の残存率は 30％である。（大西）

30 の色調は灰（7.5Y5/1）である。焼成は良好で、胎土は極密である。器高 3.8㎝、底径 5.1㎝、口径 13㎝である。底部外面に回転糸切痕があり、他は回転ナデが施される。口縁部の残存率は 45%、底部の残存率は 50%である。（道家）

31～36 は合子形有台杯である。31 の色調は黄灰（2.5Y6/1）である。焼成は良好で、胎土は密である。器高 3.7 ㎝、口径 12.4 ㎝、幅 13.8 ㎝、底径 10.1 ㎝である。全体に回転ナデが施される。体部の残存率は 35％である。

32 の色調は灰黄褐（10YR6/2）である。焼成は良好で、胎土はやや粗である。器高は 3.7 ㎝、口径 12.6 ㎝、幅 13.4 ㎝、底径 9.7 ㎝である。底部外面は回転ヘラ削りが施され、他は回転ナデが施される。体部の残存率は 40％である。

33 の色調は外面褐灰（7.5YR5/1）、内面橙（7.5YR7/6）である。器高 3.6 ㎝、口径 12.7 ㎝、幅 13.6 ㎝、底径 10.6 ㎝である。焼成はやや甘く、胎土は密である。全体に回転ナデが施される。底部の残存率は 20％である。

34 の色調は灰（5Y4/1）である。焼成は良好で、胎土は密である。器高 3.4 ㎝、口径 12.2 ㎝、幅 12.8 ㎝、底径 10.2 ㎝である。全体に回転ナデが施される。口縁部の残存率は 45％である。

35 の色調は灰褐（7.5YR5/2）である。焼成は良好で、胎土はやや粗である。器高は 3.6 ㎝、口径 12.1 ㎝、幅 12.4 ㎝、底径 9.6 ㎝である。底部外面は回転ヘラ削りが施され、他は回転ナデが施される。体部の残存率は 100％である。

36 の色調は灰褐（7.5YR4/2）である。焼成は良好で、胎土は密である。器高 4.3 ㎝、口径 11.0 ㎝、幅 11.5 ㎝、底径 9.2 ㎝である。底部外面は回転ヘラ削りが施され、他は回転ナデが施される。底部外面に「×」のヘラ記号がある。底部の残存率は 50％である。

37・38 は台付長頸瓶である。37 の色調は黄灰（2.5Y6/1）である。焼成は良好で、胎土は密である。残存高 9.5 ㎝、口径 11.0 ㎝である。全体に回転ナデが施される。頸部外面には 1 条の凹線が巡る。口縁部の残存率は 20％である。

38 の色調は褐灰（10YR5/1）である。焼成は良好で、胎土は密である。残存高 5.9 ㎝、口径 11.2 ㎝である。全体に回転ナデが施される。口縁部の残存率は 30％である。

39 は長頸瓶で、色調は灰黄褐（10YR5/2）である。焼成は良好で、胎土は密である。残存高 7.8 ㎝、口径 7.2 ㎝、幅 7.7 ㎝である。頸部内面は右回転轆轤を用いて挽きあげられた様子が認められる。他は回転ナデが施される。口縁部の残存率は 90％である。

40～42 は双耳瓶である。40 の色調は褐灰（10YR5/1）である。焼成は良好で、胎土は密である。残存高 2.7 ㎝、口径 5.2 ㎝である。全体に回転ナデが施される。口縁部の残存率は 30％である。

41 の色調は黄灰（2.5Y6/1）である。焼成は良好で、胎土は密である。残存高 7.4 ㎝、胴径 16.2 ㎝、幅 18.9 ㎝である。横断面台形の板耳を持ち、円孔があけられる。耳以外は全体に回転ナデが施される。肩部外面の残存部全体に灰釉層が認められる（原始灰釉陶器）。肩部の残存率は 25％である。

42 の色調は黄灰（2.5Y6/1）である。焼成は良好で、胎土は密である。残存高 6.5 ㎝、幅 24.5 ㎝である。横断面台形の板耳を持ち、円孔があけられている。耳以外は全体に回転ナデが施される。肩部外面の残存部全体がカセているが、焼成時の状態が良ければ灰釉層があったものと考えられる（原始灰釉陶器）。肩部の残存率は 25％である。（大西）

43～48 は甕である。43 の色調は断面および内面の主体はにぶい橙（5YR6/4）で、外面の主体は灰（5Y6/1）である。焼成は良好で、胎土は密である。残存高 4.9 ㎝、口径 19.8 ㎝である。口頸部内外面は横ナデが施され、胴部外面は平行タタキ目、胴部内面の頸部寄りの箇所には指頭痕が認められる。外面の胴部の一部に自然釉が見られる。口縁部の残存率は 30％である。（村田）

44 の色調は黄灰（2.5Y5/1）である。焼成は良好で、胎土は密である。残存高 5.0 ㎝、口径 16.2 ㎝である。口頸部内外面は横ナデが施され、胴部外面に平行タタキ目が認められる。胴部内面には無文当具が用いられたと考えられる。口縁部の残存率は 30％である。（箕浦）

45 の色調は灰黄(2.5Y6/2)である。焼成は良好で、胎土はやや粗である。残存高 8.0cm、口径 20.5cm である。口頸部内外面は横ナデが施され、胴部外面は平行タタキ目、胴部内面には無文当具痕が認められる。また、胴部外面と口縁部内面には黄土が濃く塗布されており、口縁部外面と胴部内面には黄土が薄く塗布されている。口縁部残存率は 30％である。(水谷)

46 の色調は、外側の自然釉がかかっていない部分が浅黄橙（10YR8/3)、上部断面が橙（5YR6/6)、口縁部と自然釉がかかる上部が黄灰（2.5Y6/1)、自然釉がかかる下部が青黒（5BG2/1）である。焼成は良好で、胎土は密である。黒色斑点が見られる。残存器高 8.1cm、口径が 27.2cm である。全体に横ナデが施される。外面の口縁部以外の部分と内面に自然釉が見られる。口縁部の残存率は 25%である。(杉本)

47 の色調は灰（N5/0）である。焼成は良好で、胎土は密である。残存高 9.4 ㎝、口径 25.2 ㎝である。全体に横ナデが施される。口縁部の残存率は 30％である。（箕浦）

48 の色調は灰黄（2.5Y7/2）で、黄土のハケ塗り部分は灰（N5/）である。焼成は良好で、

胎土は密である。黒色斑点が見られる。残存高 7.5cm、口径 62.8cm である。全体に横ナデが施される。内外面に黄土がハケ塗りされる。口頸部外面に波状文が施される。口縁部の残存率は 13%である。（杉本）

３．鳴海 52 号窯跡出土資料の時期について（図 3～5）

鳴海 52 号窯跡出土品について、前章で個別資料の報告を行ったが、主に供膳具に着目して本窯の所属時期を考えたい。

杯蓋は 1～4 のように天井部が比較的扁平気味のものと、5～10 のように丸く緩やかに盛り上がるものとがある。口縁部付近に着目すると、1～9 のように下方へ折り返すものと、10 のように下方へ折り返した後に更に「く」の字形に折り返すものもある。

有台杯（11～20）は底部外面に回転ヘラ削りを施すが、11・14・15 のように底部外面中央に回転糸切痕が残るものがある。19・20 のように高台から腰部外面へ比較的明瞭な面を持つものがあるが、他は明瞭な面を持たない。高台は断面台形のものが多く、16・18・19 のように外端で接地するものもあるが、多くは水平に接地する。

無台杯は底部外面に回転ヘラ削りを施すもの（21～23）、回転ヘラおこし痕を持つもの（24）、回転糸切痕を持つもの（25・26）がある。無台椀（27～30）は底部外面に回転糸切痕を持つ。

以上の供膳具の諸特徴や、31～36 のような合子形有台杯の存在は、概ね岩崎 25 号窯式（註 6）の特徴に合致するものと考えられる。長頸瓶については、口縁部がラッパ状に開く折れ肩の台付長頸瓶と考えられるものと（37・38）、口縁部が強く外反した後、上方に折り返して縁帯とする丸肩の長頸瓶と考えられるもの（39）の 2 種がある。この 2 種が共に出土する状況も、岩崎 25 号窯式期の岩崎 25 号窯跡や黒笹 41 号窯跡に見られる（註 7）。今回報告した本窯の出土品については、岩崎 25 号窯式期の特徴を持つものが多いと言える。

ただし、40～42 の双耳瓶については鳴海 32 号窯式期から登場する器種とされ、先に述べた長頸瓶（39）も形態的には鳴海 32 号窯跡の出土品に近い（註 8）。本報告における鳴海 52 号窯跡の出土品は、一部に鳴海 32 号窯式期にかかる可能性があるものを含みつつも、概ね岩崎 25 号窯式期を中心とした時期に位置づけておきたい。なお、43～48 の甕については、47 のように口縁部が垂下して縁帯になる形態は鳴海 32 号窯式期以降の所産と考えられるが、それ以外は現状では岩崎 25 号窯式期の範疇で捉えておきたい。8～9 世紀代の当該期の猿投窯の甕については、バリエーションや形態変化等が十分に分析・検討されているとは言い難く、甕の時期的な位置づけは今後の課題と言える。（大西）

おわりに

鳴海 52 号窯跡出土品については、本稿で報告したもの以外にも膨大な量がある。あくまで本稿で報告した資料群に限って言えば、先述のように岩崎 25 号窯式期に所属時期の中心が求められると考えた。岩崎 25 号窯式期は、前後の時期に比べ猿投窯内での操業窯数が極

端に減少する時期として知られ、1 窯式前の高蔵寺 2 号窯式期に 50 基、1 窯式後の鳴海 32 号窯式期に 97 基の窯が確認されているのに対し、岩崎 25 号窯式期には 3 基のみが確認されているのにとどまる（註 9)。近年、筆者は岩崎 25 号窯式期として捉えられる可能性のある窯として 3 基程資料紹介を行ったが（註 10)、それでも本窯式期の資料がわずかであることに変わりない。本稿で報告した鳴海 52 号窯跡についても、猿投窯における岩崎 25 号窯式期の状況を考える上で、重要な資料の一つになるものと考えている。

引き続き本窯跡出土資料の調査を継続し、追って報告を行っていきたい。（大西）

［註］

（1）大西遼 2018「愛知県下の窯業遺跡出土資料に関する基礎的調査報告Ⅰ－猿投窯東山地区及び尾北窯篠岡地区出土須恵器・瓷器の考古学的調査－」『愛知県陶磁美術館　研究紀要』23　愛知県陶磁美術館。

大西遼 2019「愛知県下の窯業遺跡出土資料に関する基礎的調査報告Ⅱ－猿投窯東山地区及び尾北窯出土須恵器・瓷器の考古学的調査」『愛知県陶磁美術館　研究紀要』24　愛知県陶磁美術館。

大西遼 2020「愛知県下の窯業遺跡出土資料に関する基礎的調査報告Ⅲ－猿投窯東山地区出土瓷器の考古学的調査」『愛知県陶磁美術館　研究紀要』25　愛知県陶磁美術館。

大西遼 2021「愛知県下の窯業遺跡出土資料に関する基礎的調査報告Ⅳ－猿投窯黒笹・東山地区出土須恵器・瓷器の考古学的調査」『愛知県陶磁美術館研究紀要』26　愛知県陶磁美術館。

大西遼 2022「愛知県下の窯業遺跡出土資料に関する基礎的調査報告Ⅴ－猿投窯黒笹 91 号窯跡、中世猿投窯出土重要陶片の考古学的調査－」『愛知県陶磁美術館研究紀要』27　愛知県陶磁美術館。

大西遼・河野あすか 2023「愛知県下の窯業遺跡出土資料に関する基礎的調査報告Ⅵ－猿投窯井ケ谷地区・東山地区出土資料の考古学的調査－」『愛知県陶磁美術館研究紀要』28　愛知県陶磁美術館。

大西遼・栗名彩香 2024「愛知県下の窯業遺跡出土資料に関する基礎的調査報告Ⅶ－岩崎 25 号窯式前後の須恵器窯、桟敷 1 号窯跡、八事一堂跡出土資料－」『愛知県陶磁美術館研究紀要』29　愛知県陶磁美術館。

（2）愛知県立大学日本文化学部の 2025 年度前期の授業「比較考古学」において、愛知県陶磁美術館で須恵器の実測を行った。実施日は 2025 年 4 月 23 日、5 月 14 日、21 日、6 月 11 日、6 月 18 日で、午前に作業を行った。美術館において内記と大西が学生に実測の指導及び監督を行い、その後、6 月 25 日に大学において内記が実測図のトレースの指導と監督を行った。

（3）井上喜久男・城ヶ谷和広 2015「第 5 節　編年論」『愛知県史』別編　窯業 1　古代　猿投系　愛知県。

（4）愛知県史編さん委員会 2015『愛知県史　別編　窯業 1　古代　猿投系』愛知県。

（5）原始灰釉陶器という語は、楢崎彰一が鳴海 32 号窯式・折戸 10 号窯式期の猿投窯で出土する壺・瓶類等に対して用いたことに始まる（楢崎彰一 1968「瓷器の道（1）―信濃における灰釉陶器の分布―」『名古屋大学文学部二十周年記念論集』名古屋大学文学部）。その後も原始灰釉陶器という語は、生産される窯式期の幅に変更を加えつつ、今日に至るまで猿投窯研究で用いられてきた。ただし、原始灰釉陶器に見られる灰釉層がどのように生じているのかについては、諸説があり未解明のままである。

（6）、齊藤孝正 1984「岩崎 25 号窯式の設定」『愛知県日進町株山地区埋蔵文化財発掘調査報告書』日進町教育委員会。前掲註（3）。

（7）齊藤孝正・楢崎彰一・他 1984『愛知県日進町株山地区埋蔵文化財発掘調査報告書』日進町教育委員会。尾野善裕・嘉見俊宏 1997『社団法人愛知県トラック協会研修センター用地内埋蔵文化財発掘調査報告書』三好町教育委員会。

（8）前掲註（3）。

（9）井上喜久男 2015「平安時代の瓷器生産」『愛知県史』別編　窯業 1　古代　猿投系　愛知県。

（10）前掲註（1）大西遼 2021、大西遼・栗名彩香 2024。大西遼 2022「8 世紀前半以前の西三河の須恵器生産」『伊保廃寺発掘調査報告書』名古屋大学大学院人文学研究科考古学研究室・豊田市。

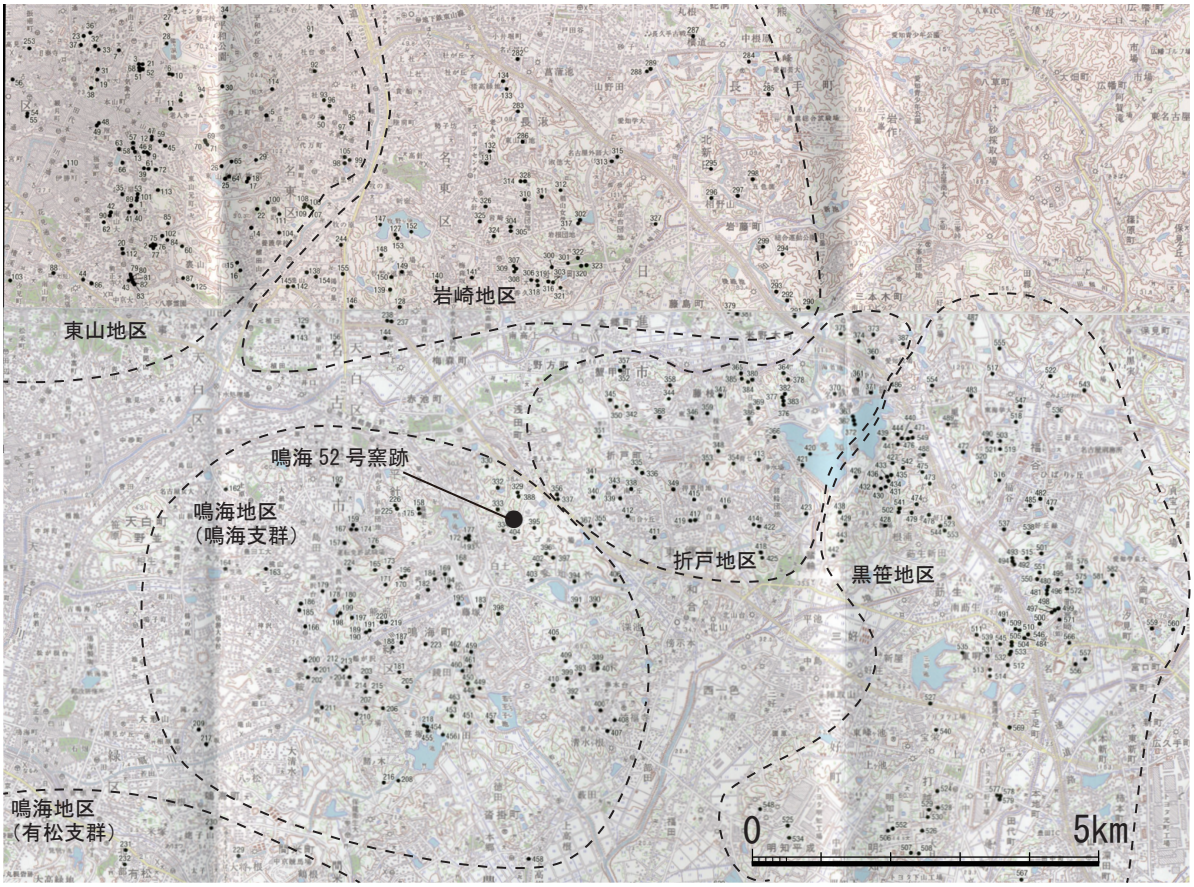

図 1　本稿で扱う資料の出土遺跡（註 4 文献を改変）

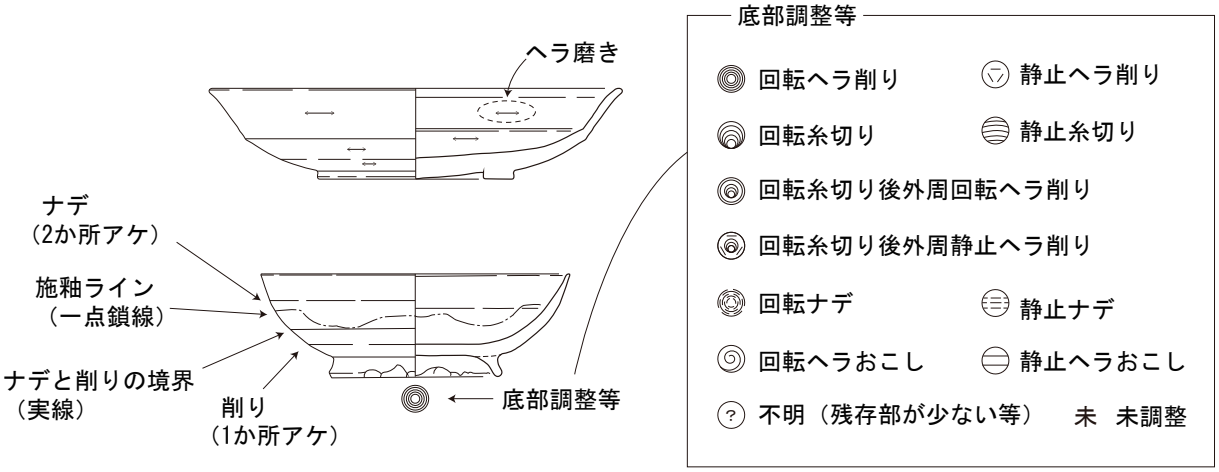

図 2　実測図凡例（以下の文献を改変：大西遼 2025『猿投窯調査研究報告　第 1 集　令和 6 年度猿投窯出土品整理調査報告書（岩崎 17 号窯跡、折戸 9 号窯跡、黒笹 12 号窯跡、黒笹 13 号窯跡、折戸 53 号窯跡）』愛知県陶磁美術館）

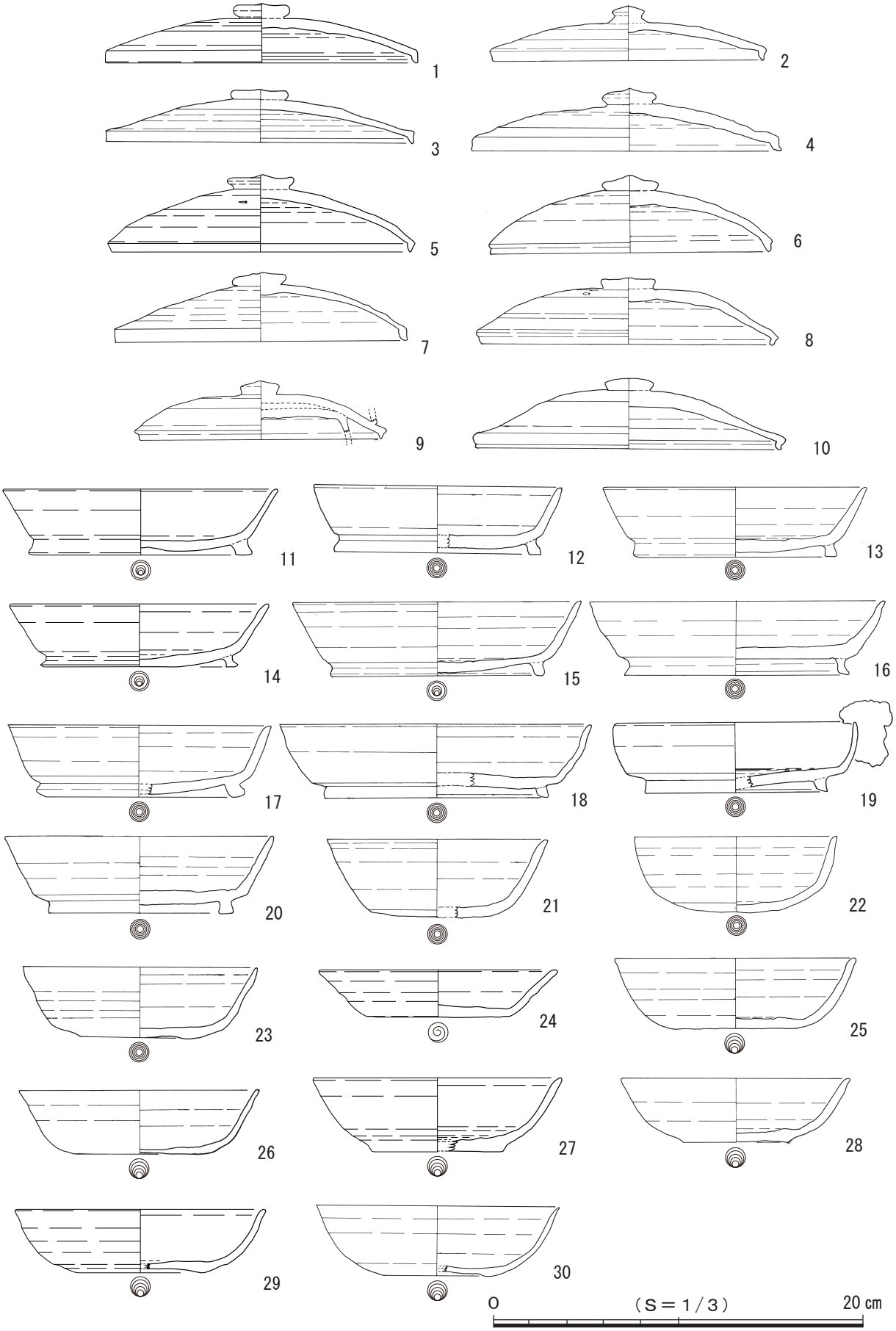

図 3　鳴海 52 号窯跡（NN-52 号窯跡）出土品①(個人蔵)

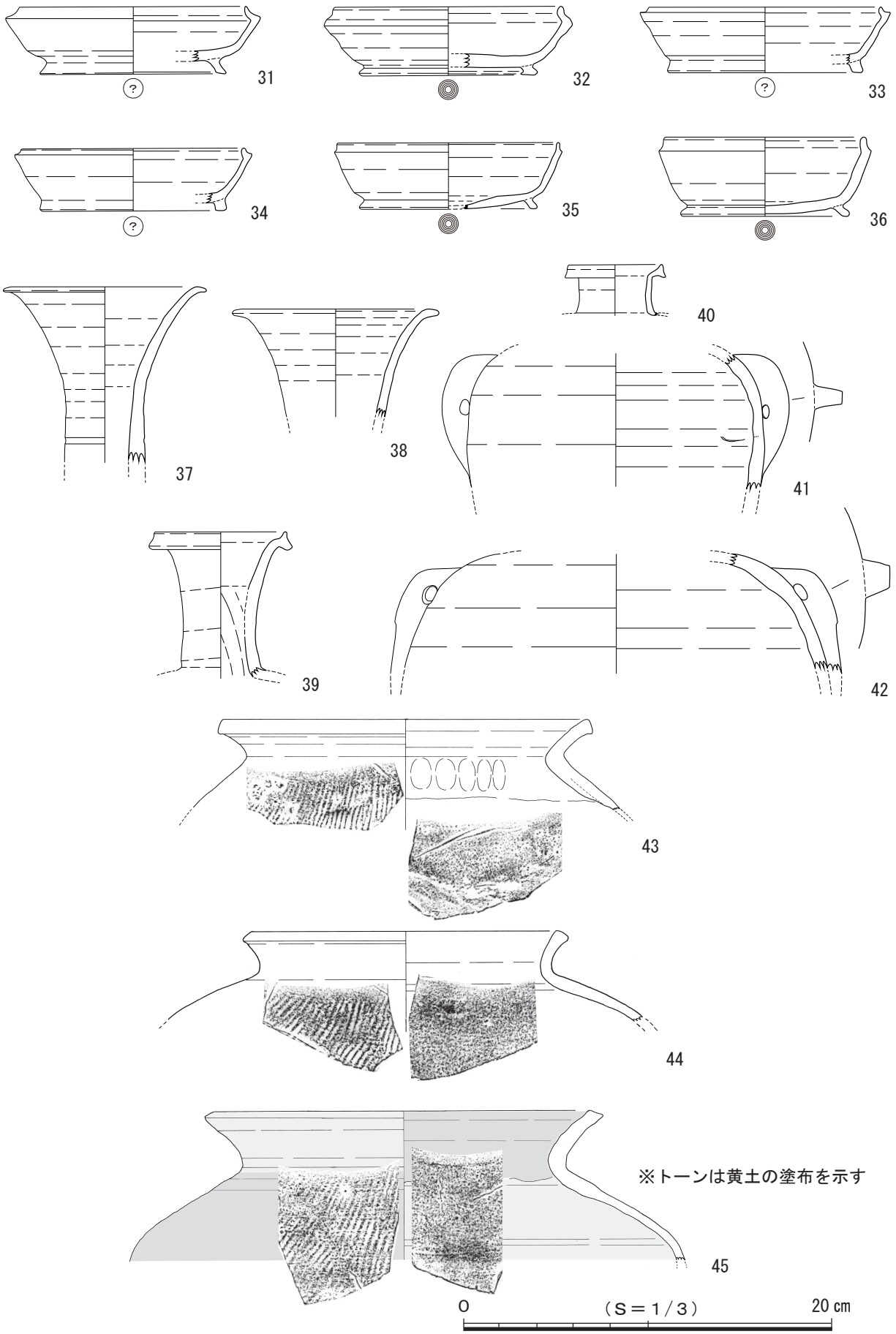

図 4　鳴海 52 号窯跡（NN-52 号窯跡）出土品②(個人蔵)

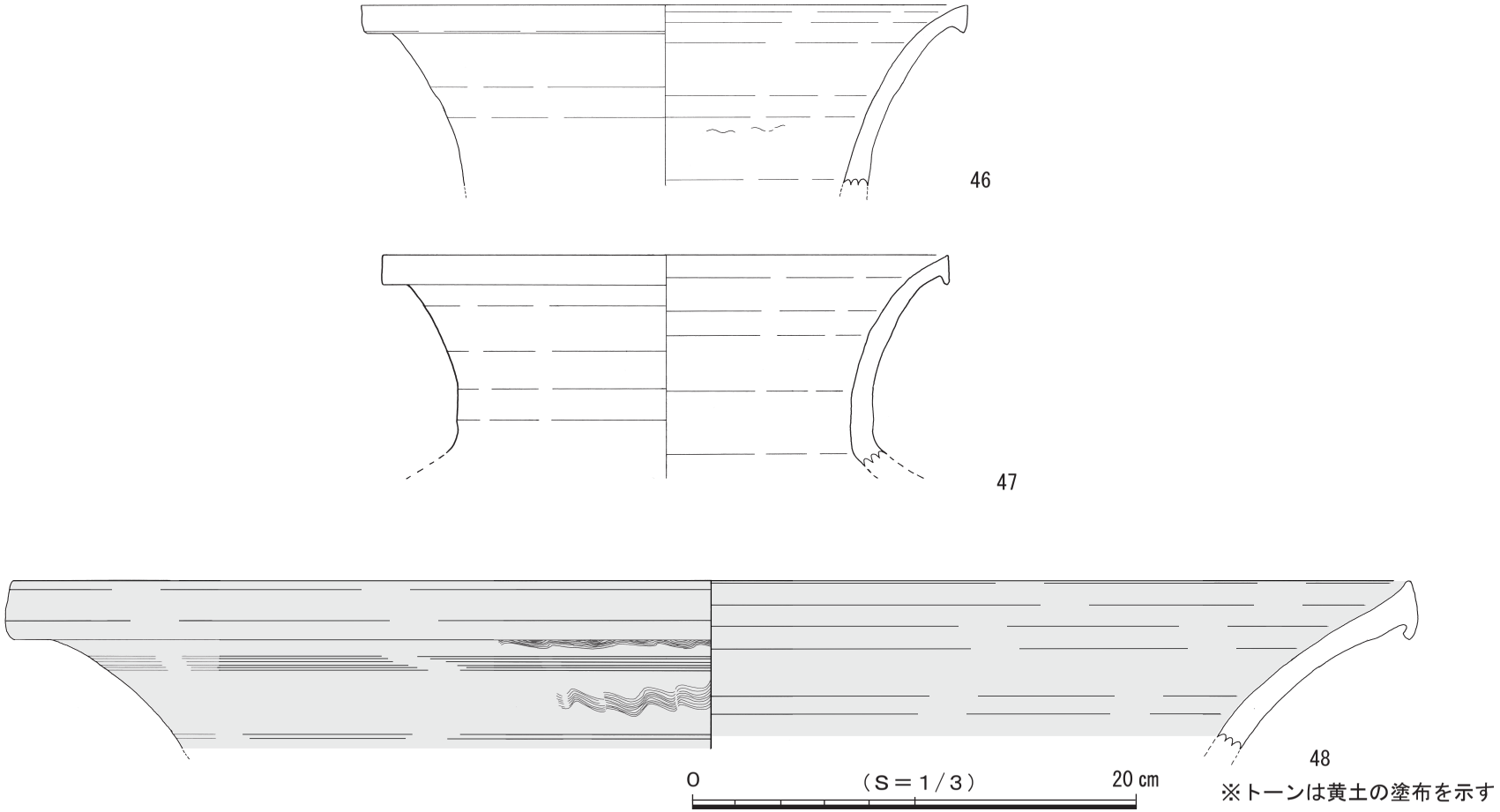

図 5　鳴海 52 号窯跡（NN-52 号窯跡）出土品③（個人蔵）